第11回古代史研究会例会（2012年3月25日開催予定、於京都大学）

シンポジウム「西洋古代史の語り方：方法・目的・需要」趣旨説明

南雲泰輔（日本学術振興会特別研究員）

現代の歴史学界における専門分化及び関心の多様化は、知見の拡大深化に資するという意味において、本来は積極的意義を持つべきはずのものである。しかしながら、これらは研究の細分化及び関心の拡散と表裏一体をなすものでもあるために、今日では肯定的というよりも否定的に捉えられることが多いように思われる。

既に20世紀初頭においてドイツの社会学者マックス・ウェーバーは、当時の学問の著しい専門分化を指摘するとともに、「こんにちなにか実際に学問上の仕事を完成したという誇りは、ひとり自己の専門に閉じこもることによってのみ得られるのである」と述べ、かかる傾向が以後も継続するであろうことを鋭く予言していたが（1）、今日の学問状況がまったく彼の予言通りとなっていることは、大方の認めるところであろう（2）。

他方、我が国の西洋史学界では、かように狭く専門に閉じこもる態度を俗に研究の「蛸壺化」と称し、これを戒める言葉が（とりわけ企画者をも含む若手研究者に向けて）再三再四繰り返されてきたことは周知の通りであるが、そのような戒めが繰り返されるということ自体、逆にかかる研究の「蛸壺化」が、根本的に是正されることなくかつ長期にわたって着実に進行してきた事実を如実に示すものである。それゆえ、現在における研究の「蛸壺化」の問題は、単にその時々の若手研究者の（若さゆえの）視野狭窄と歴史的思考力の貧困にのみ因由するものではなく、かくのごとき「蛸壺化」した研究者を養成し続けてきた大学教育と学界全体の構造的な問題としても認識される必要があろう。

ともあれ、かかる事態の原因を何処に求めるにせよ、結果として現在では、職業的な歴史研究者の研究成果は、もはや「一般の人々の関心をひくことはなく」、「一般の人々の心に響かなくなっている」と、歴史研究者自身によって指摘されるという局面にまで逢着しているのであり、かかる事実は重く受け止められねばなるまい（3）。

では、このような現状を眼前にして、我が国の西洋古代史研究者はいかなる対応をなすことが可能であろうか。この問題について、本シンポジウムでは「西洋古代史の語り方」と題して歴史叙述の問題を取り上げ、「方法」・「目的」・「需要」という相互に密接に関連し合う三つの観点からこれを考えたい。すなわち、現代日本社会で必要とされる西洋古代史とは、どのような方法で、何のために、いかなる要請を捉えて語られうるものであるかを、各論点についてそれぞれ検討することを通じ、現代日本に相応しいものとしての「西洋古代史の語り方」を模索することが、本シンポジウムの課題である。

かつてドイツの古代史家ヨーゼフ・フォークトは、歴史学における専門研究の「飽食」と「単なる史料集めに終始する態度」を疑問視し、一般社会は「歴史に包括的な世界像を形成するための本質的な寄与を期待している」と述べ（4）、かのE.H. カーは、歴史とは「現在と過去との間の尽きることを知らぬ対話」であると述べた（5）。かかる碩学たちの顰に倣えば、我が国の西洋古代史研究もまた、現代日本の「今」を捉え、一般社会からの要請に応えるべく努力せねばならぬことは縷言を要しまい。しかしながら、職業的な歴史

研究者は、懸念されるところの専門分化を自ら進行せしめ、しかも自らの生きる「今」に対して無関心であるがゆえに、もはや専門分野の外にいる人びとにとって重要な存在ではなくなって久しく、そのために一般社会に歴史の面白さを伝えるという本来歴史研究者が果たすべき役割も、現在ではその大部分が歴史小説や映画によって担われるようになってしまった（6）。それゆえ、歴史研究者による研究成果が、一般社会に対する魅力や訴求力を取り戻し、その存在意義と価値とを再び主張するためには、かかる現状を踏まえたうえで、新たな歴史叙述のあり方を探究する必要があると考えられる。

無論、現代日本のための「西洋古代史の語り方」を考えるという本シンポジウムの課題は、日本独自の学問たる「西洋史学」のあり方の本質的な部分にも深く関わる以上、どの研究者も一家言持つべき問題であって、それゆえに論者間の見解の相違も小さくないであろう（7）。また、たとえ先述のごとき学界の現状に対する問題意識そのものは共有されていたとしても、現実に進むべき具体的な方向性や採るべき実際的な方途の問題となれば、論者各人の世代・経験・姿勢・立場等々に基づき多様な見解や主張が存在するはずであり、それらを総合し体系化することは至難であろうことも容易に想像しうる。

しかるに、本シンポジウムの課題は、こうした個々の見解や主張の相違を超えたレヴェルにおいて、意義と重要性とを持っていると企画者は考える。学界の現状は、単に研究者個人の「蛸壺化」の問題であるばかりでなく、歴史学の存在意義そのものにも深刻な影響を及ぼす可能性があり、従ってこれへの対処は喫緊の要事と考えられるからである。その意味において、本シンポジウムの課題は、まずは西洋古代史の領域において設定されたものであるが、我が国の西洋史学のあり方全般に対する問題提起ともなるであろう。

（1）M. ウェーバー（尾高邦雄訳）『職業としての学問』岩波文庫、1980年、21-23頁。
（2）例えば、我が国の歴史学の現状について、『岩波講座世界歴史1 世界史へのアプローチ』岩波書店、1998年、6-7頁。
（3）羽田正『新しい世界史へ：地球市民のための構想』岩波新書、2011年、4-7頁。
（4）J. フォークト（小西嘉四郎訳）『世界史の課題：ランケからトインビーまで』勁草書房、1965年、245頁。
（5）E.H. カー（清水幾太郎訳）『歴史とは何か』岩波新書、1962年、40頁。
（6）Cf. H. White, Afterword: Manifesto Time, K. Jenkins, S. Morgan & A. Munslow eds., *Manifestos for History*, London & New York, 2007, 222. 羽田（2011年）4-7頁。
（7）例えば、竹中亨「西洋史学と実証」『西洋史学』191、1998年、204-211頁及び阿河雄二郎他「フォーラム　21世紀の西洋史学」『西洋史学』200、2000年、296-312頁所収の各見解を比較対照のこと。西洋古代史の領域ではさしあたり、南川高志編「フォーラム　古代史研究から見た西洋史学の将来：桜井万里子・師尾晶子編『古代地中海世界のダイナミズム』(山川出版社刊) を素材として」『西洋史学』240、2010年、336-347頁を参照。なお、本シンポジウムは、この南川編フォーラムにおいて企画者が提示した問題意識に基づき発案したものである。